

「生活」の内容と活動を どう改善していくか

生活科については、現行のねらいは維持しつつ、とくに身近な幼児や高齢者、障害のある人などと触れ合う活動の推進、さらに他教科との総合的な指導や総合的な学習の工夫も求められています。これらの課題にどのように対応していけばよいでしょうか。

学校を開くことから

「ブラジル人、イラン人等様々な外国人がいる。高齢者等様々な年代の人がいる。心身に障害をもった人もいる。身の回りには自分と違った様々な人がいる。／今、求められているものは、違いを違いと認め、共に生きていく力です。このような考え、能力や力は口でいくら説いても身につくものではありません。五感をフルに使う体験でしか身につくません。／体験には試行錯誤がつきものです。つまずき・失敗・心の葛藤、悩みがあり、感動、驚き、喜びがあります。全身で実感

し、納得するからこそ身につく、生きた力になります。／小規模校で、都市周辺部の五島小の子供たちには、様々な人と触れ合う場をつくってあげることが大切です。養護学校との交流もその一つです。

これは静岡県浜松市立五島小学校（木野翼校長）の地域の人たちへの学校だより「ことう」の記事。発行者の鈴木儀一校長はその背景を次のように語ってくれた。「担任は保護者に学級だよりを出すわけですから、地域の人たちへの学校だよりは教頭の責任です。校長が学校を地域に開くことに積極的で、私も生活科の活動で地域の人たちが子どもたちの先生とい



静岡大学教授
馬居 政幸

うことを痛感しました。地域の人たちに助けてもらうには、学校と子ども様子を知ってもらうのが第一です」。

私は「ことう」の記事と鈴木先生の言葉のなかに、本稿の課題の具体化へのポイントを見出した。その一つは、すべては学区のなかにあること。二つは、問題は地域でも子どもでもなく教師のあり方。その理由を「中間まとめ」を改めて確認することから述べたい。

何が問題か

「ア 現状と課題」についての指摘は「画一的な教育活動」「知的な気づきの深化不足」の二点に要約できよう。これを受けた「イ 改善の内容」は三点。その一番目に「ア 各学校において、地域の自然や施設を活用するなどして地域や児童の実態に応じた多様な活動や体験が一層

展開できるようにする」とある。これに本稿の課題である「(イ)幼児や高齢者、障害のある人などと触れ合う活動」「(ウ)他教科との総合的な指導や総合的な学習の工夫」が続く。この順序は重要。「現状と課題」での二つの課題の解決のために「改善の内容」の(ア)の実践があり、その結果として(イ)・(ウ)が可能になる。

まず「画一的な教育活動」と「知的な気づきの深化不足」。この二つは一見異なる課題に見えるが根は同じ。「地域や児童の実態に応じた多様な活動や体験」を各学校で展開すればおのずと解決できる。

本来、生活科は教師が活動の契機（縁）となる「ヒト・モノ・コト」を求めて地域を歩き、子どもの関心と意欲に応じる環境構成から始まったはず。だがいつしか事前に定めた指導案にしたがい動く子どもを望むようになっていないか。これが「画一的」の原因。言い換えれば、画一的は地域や子どもの実態から離れることから生じる現象である。それと同時に、教師の期待する知識の確認を優先し、子ども自身の気づきを読み取る努力を惜しむことではないか。

本来どんな活動にも子どもが学びはあ。まして成長著しい低学年の子どもに

学びのない活動などあり得ない。問題は教師がそれを読み取れるかどうか。ただし、その過程は不確定で潜在的。子ども自身も自覚ないままに進むことが少なくない。教師が見出し評価することで初めて、子どもは自己の学びの価値に気づくことができる。これが知的な深化の第一歩。すなわち、知的な気づきの深まりは、知的なことを教えることで可能なのではない。活動の過程で芽生える子どもの学びを見出し、顕在化させ、その価値を子どもに気づかせる教師の支援のありかたで決定される。

さらに子どもの現れは活動のありかたとセット。一人の教師と教室のなかだけで、一人ひとりの意欲に応じた「人・場・機会」を用意することは不可能。「各学校において」とある理由。改めて五島小学校の学校だよりと鈴木先生の言葉を読み返してほしい。

地域に人と情報のネットワークを

幼児も高齢者も障害のある人も特別な存在ではない。みんなともに生きる人たち。学校の内外、子どもたちの活動が豊かであればあるほど人との交わりは広がりが深まる。そのなかに幼児も高齢者も

障害のある人も、そして異なる文化で生まれ育った人もいるはず。合科も原理は同じ、生活科の活動が豊かであればあるほど他教科の学びと重なるはず。それを互いの学習と活動に生かせるかどうかが課題。さらに生活科を育む人と情報のネットワークはそのまま総合的な学習を支えるネットワークになる。生活科で育つのは子どもだけではない。「地域の教師」が活動への参加を通じてどれだけ育つか、学校の教師の力量。そのヒントもまた「ことう」にある。冒頭の記事のあとに養護学校と交流した子どもの様子が次のように報告されている。「緊張した、驚いた、ちょっとこわい、大変がんばってえらい、元気がいい、もっと仲良くしたい／初めての交流で子供も教師もとまどい、迷い、悩みました。しかし、人と人が触れ合う、心を通わす、感動、喜びも味わいました。校区にある養護学校です。地域の人みなで交流できたらと思います」。

＜参考資料＞

- ① 拙稿「新学力観で学校が変わる」「シリーズ・現代的教育課題に挑む」きょうせい。
- ② 拙稿「新しい子どもととらえ方・生かし方」「評価で子どもを育てる」きょうせい。
- ③ 拙稿「学習環境の改善(1)子供と地域に開かれた世界を」「初等教育資料平成一〇年三月号」。

教職研修 目次

1998/3/1 VOL. 26-7 No. 307 特大号

●巻頭論文	学校現場の無断引用	土佐女子短期大学長	片岡徳雄	11
●教育の断面	心の教育に何が必要か	日本経済新聞論説委員	石田修大	16

管理・法規

教育と法律の接点・36	中・高一貫教育の導入	駒場東邦中・高等学校校長	菱村幸彦	20
例解・教育管理の基礎知識				

文部省教職員課	新田正樹	文部省幼稚園課	森友浩史	文部省高等学校課	満尾俊一
文部省中学校課	和田勝行	文部省調査統計企画課	佐藤 誠		
文部省中学校課	先崎卓歩	文部省体育課	石田澄夫		
教育部事務局	中津城女学園刺殺事件と危機管理的発想	上越教育大学教授	若井彌一		
ベシック教育法規セミナー・36	学習塾の講師を依頼されたが	早稲田大学教授	下村哲夫		

連続特集

教課審「中間まとめ」の徹底分析と具体化への課題(3)

①	山陽学園大学副学長	秋山和夫	40	①7	静岡大学教授	馬居政幸	72
②	お茶の水女子大学教授	内田伸子	42	①8	国立教育研究所室長	吉田 孝	74
③	国立教育研究所室長	有元秀文	44	①9	千葉大学教授	藤澤英昭	76
④	千葉大学教授	首藤久義	46	②0	大妻女子大学教授	高部和子	78
⑤	茨城大学教授	小林一仁	48	②1	金沢大学教授	村田昭治	80
⑥	広島大学助教授	吉田裕久	50	②2	東京学芸大学教授	小澤紀美子	82
⑦	東京学芸大学教授	三浦軍三	52	②3	日本体育大学教授	森川貞夫	84
⑧	兵庫教育大学教授	岩田一彦	54	②4	兵庫教育大学教授	小林 篤	86
⑨	国立教育研究所研究員	戸田善治	56	②5	筑波大学副学長	森 昭三	88
⑩	国立教育研究所室長	工藤文三	58	②6	くらしき作陽大学教授	行 安	90
⑪	国立教育研究所室長	長崎栄三	60	②7	立教大学教授	藤田昌士	92

⑫	東京学芸大学教授	伊藤説朗	62	②8	岡山大学教授	高旗正人	94
⑬	筑波大学教授	能田伸彦	64	②9	文教大学講師	原口盛次	96
⑭	国立教育研究所室長	鳩貝太郎	66	③0	東邦音楽大学教授	小川一郎	98
⑮	広島大学教授	武村重和	68	③1	教育ジャーナリスト	有 園 格	100
⑯	上越教育大学教授	戸北凱惟	70				

教育理念

二〇一〇年までの日本の教育・27	長くなる在学年数	国立学校財務センター教授	市川昭午	115
教師と子どもの健康講座・10	白亜の病院	関東通信病院消化器センター長	神坂和明	136
学校における生徒の法的地位・15	生徒の「信教の自由」と学校教育(1)	国立教育研究所室長	結城 忠	138

教育実習

学校改善へのディヴァイス・55	調和のとれた組織風土づくりに向けて……寺田忠史／牧 昌見	119
教員研修を考える・13	リーダー研修のあり方(2)……群馬県教育委員会学校指導課課長補佐 飯野 真幸	122
学校改善と校長のリーダーシップ・14	エスノグラフィによる研究(1)……九州大学教授 中留武昭	126

教育内容・方法

生きる力を育む朝の読書・11	日本の学校教育の根幹を変えるもの	市川学園教諭	林 公	104
実化する社会と学習指導・28	多様化する学習活動と授業研究(7)	教育ジャーナリスト	有 園 格	132
資料	教育職員養成審議会「養護教諭の養成カリキュラムの在り方について」(報告へ全文)			32
	中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方に関する小委員会」			34
	「新しい時代を拓く心を育てるために」(中間報告の骨子案)へ全文			

★速報!10年度教育行政管理職選考問題(解説・答案例・講評)

栃木県/新潟県/静岡県/静岡市/大崎市/岡山県/福岡県	元東京都公立小学校長	平井文雄	150
■論文添削経営	管理・法規/内容・方法		164

★4月の校務カレンダー

創価大学教授 中野目直明/帝京大学助教授 佐藤晴雄

(新シリーズ・No.1 大好評発売)

新教育課程の論点徹底理解・全6巻

〔監修〕河野重男/〔編集〕有 園 格
(東京家政学院大学長) (教育ジャーナリスト)
(中教審・教課審委員)

①教課審「中間まとめ」

—全課題徹底理解—

教課審「中間まとめ」全文を現場の視点から最重要100課題に設問化。全項目に「課題を考えるポイント」を示し新教育課程の具体像を明らかにする。「中間まとめ」全文掲載。 B 5判/2350円(税込)

(大好評最新刊)

「生きる力」を育てる新しい授業・全6巻

〔責任編集〕加藤 幸次/河合 剛英
(上智大学教授) (神奈川大蔵小教団)

⑤多様化へ対応する授業

—実践の工夫と技術—

多様化する社会・子どもに対応する授業をどう進めるか。問題解決力、国際理解力、情報活用能力、環境問題解決力などを育む授業の構想・展開を先行事例とともに提示。 A 5判/本体2200円

学校を変える実践課題・全6巻

〔監修〕河野重男/〔編集〕有田和正
(東京家政学院大学長) (愛知教育大学教授)
(中教審・教課審委員)

Ⅵ多様な指導方法を工夫する

自ら考え、学習する力を育成する特色ある教育を展開するための多様な指導方法を「授業形態」「問題解決的学習」「体験的学習」の視点から、先進18事例とともに解説。 B 5判/2350円(税込)

教育課程審議会「教育課程の基準の改善の基本方向について」(中間まとめ)は、全文を平成9年12月号に掲載しております。併せてご活用ください。

□今月のポイント概念□

情報通信機器と子ども	15
教育課程審議会「総合的な学習の時間」	169
メディアセンター/文書管理	171
職業観・勤労観/ブライバシー保護	173
個性重視の原則/教育上の例外措置	175